民具と民芸とモノの機能

濱田　琢司（南山大学）

キーワード
民芸運動、民具と民芸、モノの機能、自在鉤

１．はじめに

民具と民芸とは、ともに、同じ時期にその枠組みが発生し、そして、しばしば類似の対象がその呼称のもとに含まれてきたものであった。すなわちいずれも、大正中後期から昭和にかけて、民衆の生活に関わる用具・雑器類を収集し、価値付け、分類していくという動きのなかで、位置付けられていったものであった。

その一方で、民具研究と民芸運動に関わった両者の担い手らは、それぞれを、自らとは異なったものとして自認することで、長く、実質的に没交渉のような状況にあった。おって簡単に触れるように、それぞれが（特に民具研究の側が）、相手との違いを強調するような語りを示すことはあっても、それが、議論や交渉へと発展することは（ほとんど）なかった。

社会学者の竹中均は、そうした状況を「平行線」とした上で、渋沢敬三の民具研究と柳宗悦の民芸運動との間に、柳田国男の民俗学を「補助線」として加えることで、平行線を交差させる可能性を提示している。しかし、平行線を交差させようとする、そうした取り組みは、「ようやく始まった」ところであるという（竹中 2003: 219-223）。これは、2003 年の論文であるので、それから 10 年超が経過していることになる。けれども、その状況は、大きくは変わっていないようにみえる。

一方で竹中は、「柳田民俗学と民具研究とが一枚岩ではなく、その間に質的な差異があ」ることに注目することが、「民俗学・民具研究・民芸の三者鼎立関係」への可能性を開くポイントであると指摘している（竹中 2003: 219-222）。すなわち、民具や民芸を、それぞれステレオタイプ化せずに論じること、あるいは、それらのステレオタイプ化された状況を解体することから、平行線を交差させる可能性が生じてくるというわけである。逆に言うと、それぞれに対する一枚岩的認識が、それぞれを「別のもの」として認識させてきてしまったということになるだろう。それは例えば、柳田と柳という創始者たち同士においてもそうであった。竹中も指摘するように、『月刊民芸』誌上で行われた両者の対談[1]においても、「経験学としての民俗学」と「規範学としての民芸」という切り分けがなされ、両者がそれを受け

[1] 目次上は、対談となっているが、ここに、司会として式場隆三郎が、また「沖縄県人」として比嘉春潮が加わる形となっている。比嘉が、「沖縄県人」として参加しているは、この対談が、柳らが 1938 年から 40 年にかけて引き起こした、いわゆる沖縄方言論争からの流れで実現したという経緯があるためである。

入れる形で、それぞれを（あえて）対峙させている（柳田・柳 1940: 26-28）。

しかし、実際は、民芸も民俗学も、また民具研究も、そのように一枚岩的に一元化できるものでは、もちろんない。それぞれの位置付けには、様々なゆらぎがあり、そのゆらぎの捉え方によっては、互いが、大きくオーバーラップするようなことも起こりうる。こうした点については、例えば、民芸については、1990 年代の後半から柳らの業績を振り返るだけではない、分析的な研究が急激に増加したこと（例えば、金谷 1996、竹中 1999、土田 2007、濱田 2006 など）によって、一枚岩的理解は、ずいぶん変化してきたようにみえる。他方、民具研究をはじめとした周辺領域についても、丸山（2013）や加藤（2011）など、新しい視点を提示しようとする研究も複数見られるようになっている。そこで本稿では、こうした研究も踏まえつつ、主に民芸を対象としながら、その位置付けのゆらぎについて検討し、それによって、民具と民芸とを交差させる動きへの始点としてみたい。

以下、いくつかの文献等から、これまでの民具と民芸の関わりを、ごくごく簡単に確認したうえで、それを踏まえつつ、民芸と民芸運動について、とくにモノの機能の扱い方という点に注目しながら、確認していくこととしたい。

２．民具と民芸の対峙

民具と民芸とが、そのような平行線の関係になるのは、第一にそれぞれのモノの取扱いのあり方の違いにある。宮本常一は、『民具学の提唱』のなかで、次のように述べる。

> 民具の中に美を求めることは意義のあることである。しかし文化を研究するための資料としては民芸品を求めるまえにまず民具を集めたいのである。そして渋沢先生もいっているように民具の個々の美を求めるまえに、民具の統一された美と力を発見したいのである。（宮本 1979）

ここでは、民芸は「個々の美を求める」ものであり、対して、民具は「統一された美と力を発見」するものであるとされる。民具のなかに生活美を認めつつも、個々の美よりも集合的なものを重視するのは、この引用にもあるように渋沢敬三も主張していたところである。渋沢は、アチックミューゼアムの収集品を念頭に民芸との違いを示している。

> アティックに集められた物を概観して不思議に感ずるのは、多く集まれば集まる程、それが、ある統一へ向って融合して行くと同時に、其処には単一の標本の上から見出せない、綜合上の一種の美を感ずることである。［中略］アティックのものは、一つ一つには随分と汚らしいものが多いが、集まるにつれて、一種特集の内的美を感ずるのは何であろうか。田方山方濱方の我々、又我々の祖先が、極めて自然裡に発明し使用して来た各種各様の民俗品の、全体を総合して考えた時、其処に我々の祖先を切実に観、又その匂ひを強く感じ、懐かしく思ふ意味に於て、自分にはアティックの収集は、その数量に於てたとへ僅少であっても、之は今述べた全体への一部分であって、而も、それは確かに有機的な一部として、血も涙も通っているという気がしてならない。兎に角、アティックの標本は、ものそれ自体が多くの場合、売る為に作られたり、人に見せる為に作

られたりしたものではなく、我々の祖先から今迄、我民族の実生活に切実にピタリとついて居る点で、極めて特殊の味がある。之を下手物とか民芸品とか云って重んじる者は、そのものゝ単独の美を逐ふのである。我アティックは全体の一部として見て、之を作った人々の心を見つめようとする。（渋沢 1933: 7-8）

アチックの収集品は、一つ一つは、「随分と汚らしいもの」ではあるが、「綜合上の一種の美」をみせるという。そしてそれは、「単独の美を逐ふ」民芸品を重んじる者とは異なるとしている。モノの取扱い方から見ると、確かに両者は、こうした対比の関係にある。

この点を、より鮮明に強調するのは神崎宣武である。神崎は、対象としての民芸と民具の共通性を指摘しつつ、次のように述べる。

たしかに、民芸の対象は民具なのだ、といってもよい。が、民具すべてが民芸の対象ではないのである。民具のなかの一部が民芸の対象となる、といえばもっと妥当であろう。

民芸については、「用の美」という表現がしばしばつかわれる。つまり、民芸は、民具類のなかの美的なものだけを選び、とりあげているのである。（神崎 1989: 127）

さらに別のところでは、モノの集め方という点から、さらにその違いを強調しつつ、指摘する。

［民具の収集において：引用者注］行った先々でどうしても骨董屋さんあるいは民芸趣味の人に遅れをとることになります。例えば味噌蔵や醤油蔵をのぞきますと、蓋と酌は残っているけど甕がない。それから甕が残っていれば、それを小口で出した片口がない。片口が残っていればそれを銘々で食べた食器がないというようなことで歯抜け状態なんです。［中略］民具研究というのは体系的とはいいませんが、連続的に複数のものを組み合わせて捉えなければいけない。ですから、まず何でも集めてみる。［中略］例えば醤油甕でありますと、蓋も酌もそれから片口も、それからその片口から醤油をつぐ小皿も、という系列で捉えなければならない。（吉田・神崎ほか2002: 37［発言者は神崎］）

「綜合」と「個々」という、両者の違いが、モノの集め方に反映されることで、民具研究の収集が疎外されるという。神崎がこうした収集を行っていた時期、いわゆる民芸ブームと呼ばれる、民芸品の一大消費ブームがおきていた（濱田 2006: 80-92）。ここで語られるような状況は、そうした時代性を背景としてもいる。個々の美を愛でるという民芸愛好のあり方が、各地の民具資料を歯抜け状態としてしまうことで、民具研究において重視される綜合性がそこなわれてしまうという。そのような点から民具と民芸を対照させようとする神崎はだから、民芸に対して、極めて否定的であり、民芸運動（と民芸ブーム）が、民具研究の様々な障害ともなっており、その「罪科」は大きいとする（神崎 1989: 130）。

このように明確でないにせよ、とくに民具研究の側からすると、民芸（運動）は、「資料」か「美」かという観点から、あるいは「綜合」か「個々」かという観点からして相容れない

ものであるとされることがしばしばあった。そして、その当事者らも、必ずしも積極的に互いを見ていこうともしてはおらず、上述のような「平行線」を辿ってきた。

３．民具と民芸の交差

しかしその一方で、神崎が、「民芸の対象は民具」と指摘するように、両者には重なるところが多い。無論、それ故に対峙的な語りが出てくるわけでだが、両者を交差させようとする試みも一定程度、なされてきた。比較的早い時期において、それに最も積極的であったのは有賀喜左衛門であろう。有賀は、渋沢を中心として、それを柳田および柳と比較した論文において、先に引用したアチックの収集品に対する渋沢の語りを示した上で、それに続き、柳の『工芸文化』における「美と生活とを結ぶものこそ工芸ではないか。工芸文化が栄えずば文化は文化の大きな基礎を失ふであろう。なぜなら文化は、何よりも先ず生活文化でなければならないからである」（柳 1942[2]: 351）という記述を参照し、「いっているのは基本的に敬三の考え方とあまり差はない」（有賀 1972: 32）としている。有賀は、1973 年に『季刊柳田国男研究』において行われた座談会「柳田国男と柳宗悦」においても、民芸的なモノの捉え方に否定的な見解を示す谷川健一に対して、民芸（柳）の意図と意義を様々に解説している（有賀・宮本ほか 1973）。

「はじめに」で言及した竹中は、別の論文において、有賀を中心として「民芸と民具のあいだ」を検討している（竹中 1999: 93-115）。その中で竹中は、有賀にとって青春期の単なる一エピソードとして語られることもある有賀と柳との関わりについて、民芸が有賀の理論構築の核心部分を刺激し続けていた可能性を指摘する。また、金谷（1996）は、民具と比較しつつ、モノを旧来のコンテクストから切り離して価値付けるという部分に民芸のまなざしの重要な要素を読み取る。これを参照した濱田（2003）は、フォークロリズムという概念を活用し、民俗や民具、民芸における審美性の問題を検討しようとした。また、丸山泰明は、渋沢と今和次郎の二人を扱った、興味深い著書の中で、渋沢と今、あるいは竹内芳太郎の柳ら民芸運動同人らへの否定的な評価を示しつつも、両者を二項対立的に捉えてしまうことの非生産性を指摘する。そして民俗学、民具研究、民芸運動を、「それぞれグループ分けして対立的な図式でとらえるのではなく、［中略］同一の地平に置き直して、それぞれの人物の思想と活動について検討していくこと」（丸山 2013: 96）の必要性を唱える。そして、渋沢と今について、これまであまり顧みられることのなかった側面、すなわち「美の観点」からこれらを捉えることで、それぞれの位置を再考することを試みている（丸山 2013: 88-130）。こうした研究においては、先の宮本や神崎にみられたような、自身の立ち位置への強い意識は後景へ退き、あくまで分析的に民具と民芸の相同相違を検討しようとしている。

一方、いくつかの企画、イベントにおいても、両者の比較が試みられることもあった。例えば、1997 年には、浜松市博物館において「民芸と民具―「美」と「歴史」の発見―」という企画展が開催されている（浜松市美術館 1997）。ほか、2001 年には、民族芸術学会の第 17 回大会が「特集　民具と民芸」として開催されている。後者に関しては、現在、国立

[2] 『柳宗悦全集』からの柳の引用・参照については、煩雑さを避けるため、文中には当該の文章の初出年を示し、文献一覧の中で、全集の刊行年を示すようにした。

民族学博物館に収蔵されているアチックの旧コレクションと日本民芸館のコレクションとをグラビアにて比較し、両者の類似性を探っている（熊倉・吉田編 2002）。具体的なモノを提示しての比較は、極めて興味深いものであった。例えば、一方では、両方に含まれる沖縄の紅型の風呂敷を並べて示しつつ、「沖縄の紅型の風呂敷をご覧いただければ明かなように、その所蔵先が入れかわっても、何の違和感もない部分がある」ことが、また一方では、民芸館の収蔵品に占める陶器の比重の大きさという相違などが指摘され、「収集されたものを前にしての議論」の重要性が示されている（熊倉・吉田編 2002: 8）。

４．民芸とモノの機能

4-1. 民芸運動における「用」と「美」

こうした蓄積は、「はじめに」において竹中の指摘を受けつつみたように、民具や民芸に対する「一枚岩」的理解を転換させようとしている（丸山の研究などは、その点を強く意識しているようにみえる）。そこでここでも、民芸運動におけるモノの機能の取扱いに注目しつつ、その「一枚岩」的理解を再考し、民具と民芸のさらなる交差へ向けての一助を提示したいと思う。

ところで、民芸（運動）を語る時に、「用の美」という言葉がしばしば使われる。それは、「用」を旨とする工芸が持つ美のことを示し、柳自身の言葉のなかにも、工芸の本分である「用」を満たすことから生じる美を重視する語りがしばしば登場する。例えば、後に『民芸とは何か』（柳 1941a）に収録された文章で、『柳宗悦全集』の解題において「好個の民芸入門となり得よう」（水尾 1980: 600）とされている「民芸の性質」という文章において、柳は、「民芸の美の特質」として六つの点を示しているが、その第一として「実用性」をあげ、「美が用途と結合してゐると云ふこと」を指摘している（柳 1941: 268）[3]。そうした点から、「用の美」とは、しばしば「機能美」と同一のものとされ、さらには日常における「使いやすさ」と結び付けられて理解されてきた。

もちろん、それは、民芸と特徴付ける要素の一つであるが、しかし、いくつかの点において、民芸における「用」は、単なる「使いやすさ」とは異なっているようにみえる。例えば、その一つは、心理的な部分の重視である。柳は、次のように述べる。

> 実用とは実際的な用であるため、とかく物質的な用とのみ思はれ易い。特に肉体の働きを助けるもの、着たり、食べたり、住んだりするのを助けるのであるから、用を物質的な意味にのみ受取り易い。［中略］だが実用といふことを物質的に解するのは果たして妥当だろうか。一面的な見方に過ぎなくなはないか。［中略］実用ということを物質的意味に受取るのは、人間の暮しを余り狭隘なものに解し過ぎる。吾〃の生活は肉体だけの生活ではない。精神を切り離した肉体といふが如きものは何処にも存在しない。生活は体の暮しであり兼て又心の暮しである。［中略］だから生活に役立つといふことは、体の求めと共に心の求めも交ってくる。物質的用と心理的用とはいつも結ばれ乍ら働い

[3] 他の 5 点は、（1 点目と重複しているが）「実用品であること」および「平常性」「健康性」「単純性」「協力性」であるとされる。

てゐる。だから機能というふことは、物理的性質を示すだけではない。それは心理的機能をも有たねばならない。（柳 1941b: 307-308）

ここにあるように、柳（あるいは民芸運動）にとっての、機能には、物理的な使いやすさとは異なった側面が含まれていた。渋沢や宮本が、民具との違いとして感じていた「単独の美を逐ふ」あり方も、こうしたモノの見方と無関係ではないであろう。

また、もう少し別な面から、柳らの「用」を再考することもできる。それは、運動初期の収集に明確にみることができる。例えば、日本民芸館開館以前に刊行された『民芸叢書第一篇　雑器の美』（日本民芸美術館編 1927）をみてみよう。図 1 は、同書の表紙であるが、ここに掲載されているのは、尾張（瀬戸）の「行灯皿」と呼ばれるもので、運動初期の収集品においては、重要なものの一つである。もともとは、行灯の中に入れ、行灯から落ちる油を受けるための皿であるという。これは、行灯における油受けという用を持ち、人々の生活に密接に関わりながら消費されてきた。柳は、そこに民芸としての美の必然を見出す。あるいは、図 2 は、同書口絵に含まれる大工道具（墨壺）である。柳によるこの図版解説は次の通りである。

墨壺には既成品もあり、自分の手細工品もあるが、古いのは皆形よい。色々変化があり且つ何れもよき彫りが伴ふ。用途の上から云って持ちよく造られ、且つ応はしい強さがある。こゝに選んだのは珍しい形ではないが、一番代表的な形だと云へる。ごく簡素で無駄な所がない。［中略］今造るものは形が皆醜い。どうしてこんな所にも堕落が来るか。（柳 1927: 107-108）

「用途の上から云って持ちよく造られ、且つ応はしい強さがある」とあるように、行灯皿と同様に、機能をもととして作り込まれた形に、ある種の「用」の「美」があると述べる。このようにみていくと、「用の美」とは、実際の機能に則したもの、すなわち「使いやすい」ものを示すかのようにも思える。しかし、上記引用中の最後にあるように、この時点での柳の関心は、古いものにあり、その視点は、現行品の「使いやすさ」とは少し異なっている。すくなくとも運動初期において柳らが愛でるのは、すでに使用されなくなった（なりつつある）「古いもの」であり、さらに、「かつて」の用途のために作り込まれた、それらがもつ、その形である。事実、彼らは、行灯皿を実際に行灯の油受けとして使うわけではないし、また墨壺を大工道具として使うわけでももちろんない。その形それ自体を、なかばオブジェのように愛でるのであって、その点において、「用の美」とは、実際の使用に際しての「使いやすさ」とは異なってくるのである。

4-2. 民芸とモノの機能―自在掛けを事例に―

この点をもう少しみてみよう。柳らは、1931 年に、運動の機関誌として『工芸』という雑誌を創刊するが、その第 3 号（1931）では、自在および自在鉤の口絵特集が組まれている。自在や自在鉤に関連する 8 点の写真とその「挿絵解説」、そして京都帝国大学の昆虫学者・山田保治による「北国の炉辺」（山田 1931）が含まれている。山田と民芸運動との関係については把握できていないが、本号の「編集余録」によれば、山田は「玉虫厨子」の研究

でも著名であり、それによって「吾々の間には親しい」人物であったという（柳 1931: 63）。

自在とは、囲炉裏に鉄瓶などをつるすための用具で、つるす際の高さを「自在」に変えられるところから自在と呼ばれたらしい。そして天井の梁の部分から、この自在を掛けるために据えられていたのが自在鉤（あるいは自在掛）である。生活の近代化にともなって囲炉裏が減少していくと使用されなくなるものであり、民芸運動がスタートした時期には、徐々にその数を減少させていたような対象であったが、運動初期においては、重視された（好まれた）収集品の一つであった。とはいえ、先の墨壺と同様、柳らは、これを囲炉裏の上でそのままに使用することを目的とはしていなかった（運動同人の濱田庄司は、自邸の囲炉裏において使用してもいたが）。例えば、図 3 は、京都の河井寛次郎の旧自邸（現河井寛次郎記念館）での写真である。テーブルセットの奥にみえるのが、自在鉤であり、それが逆さまにされオブジェとして展示してあることがわかる。ここでもその「用」は、過去のものであり、過去の用のための形それ自体が享受されている。初期の民芸運動は、前近代的な古いものを、モノそれ自体はそのままに、その使用法を変えることで現代生活に持ち込むための、いわば「見立て」を提供したわけであるが、この自在鉤は、その見立てによる転用の典型的な事例の一つであるといえる[4]。

とはいえ、彼らが、そのもともとの使用法に一切頓着ないかというと、必ずしもそうではない。むしろ、それには一定の注目を払っている。図 4 は、1932 年に日本橋の白木屋で開催された「全日本更正工芸展」という展覧会の目録（秋葉 1932）に付された写真であるが、もともとは、件の『工芸』第 3 号に図版として掲載されたものである。柳によれば、これは、石川県の宮六三郎という人物の自邸の実際の映像であるという。ここには、「長く冬に閉ざゝれる地方」における「生活と炉」とが一つとなっているような生活が示されており、その「炉になくてはならないもの」が「自在」であるという（柳 1931: 65-66）。また、山田の文章においては、その状況がより生活に則した形で語られている。

> 炉は普通「イロリ」と言われ、町では所謂茶の間に、在家では勝手の広間の何づれも多くは室の端に近い所に切られてあるが、大家では各室に切られてゐる所もある。形は四角か長方形であるが、大さも様々で、三尺角或は四尺角、或は三尺に四尺、四尺に五尺位のところであるが、一帯に町の小さくて在家のは大きい。深さは一尺前後で、町では木炭を在家では薪を焚かれる。挿絵（一）［図 4 : 引用者注］の茶棚に向って左は主人の席で、正面は客席、右は家族或は使用人の席で此所は炉に沿ひ二尺五寸位の幅で上敷が布かれ、すぐ土間になってゐて、此土間は手前玄関に奥は台所に通じて居る。
>
> 斯ふ云ふ具合に炉の周囲に於ける其れぞれの席は大抵きまって居て、親しき方との用談も、村の相談事も凡べて此周囲で茶を汲みながら其間に決められる。（山田 1931: 13-14）

自在および自在鉤が設置される囲炉裏の配置、および生活について、思いの外、子細に示さ

[4] ちなみに、手前のテーブルは、臼を逆さまにしたものであり、河井自身の考案による。これも、使用されなくなった前近代的なものを、（当時の）現代的生活に転用していこうとする運動の「見立て」のあり方を良く示している。現在も、京都の河井寛次郎記念館において見ることができる。

れている。この引用部の後、山田の文章は、「自在鉤」「釣手と縄」「「大黒」と「恵比寿」」「自在」「鉤」「歴史」「分布」というふうに、自在および自在鉤のおよその形態、分類、それぞれの用法や機能的特色、歴史的展開、使用分布の概要と、これをめぐる使用の状況と文脈を記述していく。

かつて金谷（1996）が指摘したように（そして、本稿で上述もしたように）、民芸運動は、モノを、その旧来の生産と使用の文脈から引き剥がし、近代的都市的生活のなかに新たな用法とともに持ち込んだ。ここで取り上げた、自在（鉤）も、図 3 に見られるように、運動のなかでのその主な位置づけはオブジェである。山田によるような解説も、新たな生活にそれを持ち込んだときの付加価値のように機能しているともいえる。実際、民芸運動の周辺や、後の愛好者らは、当該のモノの本来の用法を示す「本来語り」とセットで、モノを見、享受した。「本来語り」によってモノに付与される「近世らしさ」や「地方らしさ」とは、民芸を、都市生活者にとっての新たな商品たらしめる重要なイメージでもあったわけである。そしてそうした形でのモノの受容は、渋沢や宮本、あるいは神崎が違和感をもって眺めた「個々の美」の重視と連動していることも事実である。

その一方で、例えば、雑誌『工芸』を眺めていくと、ここで紹介した山田保治のように、運動の中心的な同人ではない、「専門家」が登場し解説をしていることを複数確認することができる。それは、「民芸」に付加価値を付ける「本来語り」かもしれないが、しかし、その記述には、モノの生産や使用の文脈を多く語るものもある。そこには、柳の文章からだけでは見えてこない、民芸運動におけるモノの扱い方の一端が確かに含まれており、また、同時にそれは、民具研究との交差の始点となりうるポイントでもあると思われる。

6．おわりに

ここまで、民具と民芸について、両者を比較する研究などを簡単に紹介しつつ、その交差の実現へのとりあえずの始点として、民芸運動が、モノの機能をどのように捉えていたかについて考えてみた。それは、いわゆる「用の美」に対する一般的な理解を、少し転換させるという意味において、民芸に対する「一枚岩」的認識を揺さぶることができるものであったかもしれない。結果的にそれは、これまでと同様に、民具と民芸の違いを強調することになるかもしれないが、しかし、例えば、「機能」という指標を導入することで、「資料」と「美」、「綜合」と「個々」といった二項対立の間を横断するような考察も可能になるはずである。この辺りについては、またおって考えて行きたいところである。

ところで、昨年に国立新美術館および国立民族学博物館において開催された「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」展（「イメージの力」実行委員会 2014）は、本稿の関心からするととても興味深いものであった。すなわち、（企画者の意図からは少しずれた解釈かもしれないが）それは、民博にあるコレクションを、地域や用途・機能などから分類された民族学的展示のあり方から切り離し、モノそれ自体を「美術」のように見せるとどうなるか、ということを検証しようとした企画展であった（ように思える）からであり、民芸的なモノの扱い方を想起させるものであったからである。同時にそれは、生産や使用の文脈に則したモノの収集・展示と、文脈から切り離されたそれとが、いわばコインの裏表のようなものであることも示唆してくれたように思う。生活を復元する総体としての民具へ

のアプローチも、モノの本来的な附置とは違う文脈（すなわち生活を復元する資料という文脈）にそれを位置付けるものであり、その点においては、構造的には民芸運動のモノの扱いと同様であるとも言える。マテリアリティ研究の広がりなどから、近年、モノをめぐる検討が活発になってもいる。「イメージの力」展もそうした動きを受けてのものであったかもしれないが、こうした状況のなかで、民具と民芸の関わりの検討にも、新たな光が当てられることもあるだろう。本稿が、その小さな一助となれば幸いである。

参考文献

秋葉　啓

1932　『全日本更正工芸展覧会』、白木屋。

有賀喜左衛門

1972　「日本常民生活資料叢書総序　渋沢敬三と柳田国男・柳宗悦」、日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書第一巻』、pp.1-42、三一書房。

有賀喜左衛門・戴　国輝・宮本馨太郎・谷川健一

1973　「柳田国男と柳宗悦」『季刊　柳田国男研究』3: 2-82。

「イメージの力」実行委員会

2014　『イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる』、国立民族学博物館。

加藤幸治

2011　『郷土玩具の新解釈　無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか』、社会評論社。

金谷美和

1996　「文化の消費」『人文学報』77: 63-97。

神崎宣武

1989　「やきものへの視点　民芸と民具学」、岩井宏實・神崎宣武ほか『民具が語る日本文化』、pp.125-156、河出書房新社。

熊倉功夫・吉田憲司編

2002　「カラーグラヴィア　民具と民芸」『民族芸術』VOL.18: 8-24。

渋沢敬三

1933　『祭魚洞雑録』、郷土研究社。

竹中　均

1999　『柳宗悦・民芸・社会理論　カルチュラル・スタディーズの試み』、明石書店。

2003　「郷土のもの／郷土のこと―民俗学・民藝・民具研究」、「郷土」研究会編『郷土表象と実践』、pp.204-225、嵯峨野書院。

土田眞紀

2007　『さまよえる工芸　柳宗悦と近代』、草風館。

日本民芸美術館編

1927　『民芸叢書第一篇　雑器の美』、工政会出版部。

濱田琢司

2003　「民芸と民俗―審美的対象としての民俗文化―」『日本民俗学』236: 127-136。

2006　『民芸運動と地域文化　民陶産地の文化地理学』、思文閣出版。
丸山泰明
2013　『渋沢敬三と今和次郎　博物館的想像力の近代』、青弓社。
水尾比呂志
1980　「解題」、『柳宗悦全集　第 9 巻』、pp.593-603、筑摩書房。
宮本常一
1979　『民具学の提唱』、未来社。
柳田国男・柳 宗悦
1940　「民芸と民俗学の問題」『月刊民芸』2(4): 24-33。
柳 宗悦
1927　「口絵解説」、日本民芸美術館編『民芸叢書第一篇　雑器の美』、pp.103-121、工政会出版部。
1931　「編集余録」『工芸』3: 63-67。
1940［1980］　「民芸の性質」、『柳宗悦全集　第 9 巻』、pp.262-271、筑摩書房。
1941a　『民芸とは何か』、昭和書房。
1941b［1980］　「用と美」、『柳宗悦全集　第 9 巻』、pp.305-315、筑摩書房。
1942［1980］　「工芸文化」、『柳宗悦全集　第 9 巻』、pp.345-542、筑摩書房。
山田保治
1931　「北国の炉辺」『工芸』第 3 号：pp.13-21。
吉田憲司・神崎宣武・熊倉功夫ほか
2002　「パネルディスカッション」『民族芸術』VOL.18: 35-57。

Keywords
The Mingei(Folk Crafts) movement, Minge and Mingei, function of objects, Jizai-kagi

図版

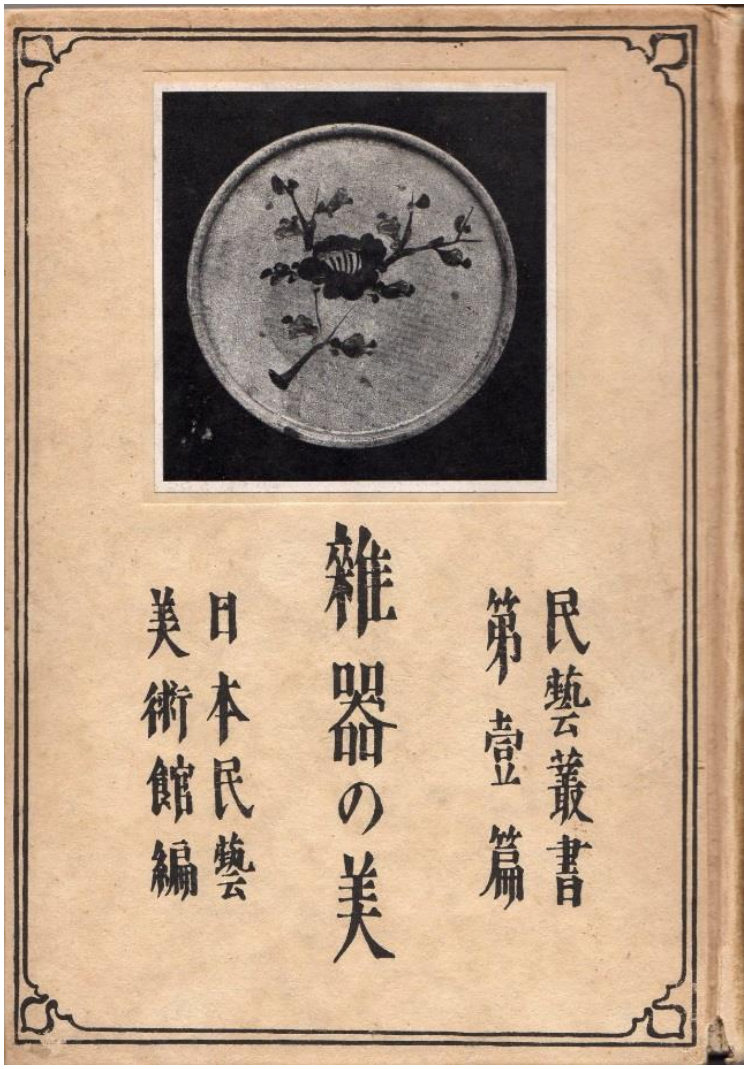

図１　『雑器の美』（日本民芸美術館編 1927）

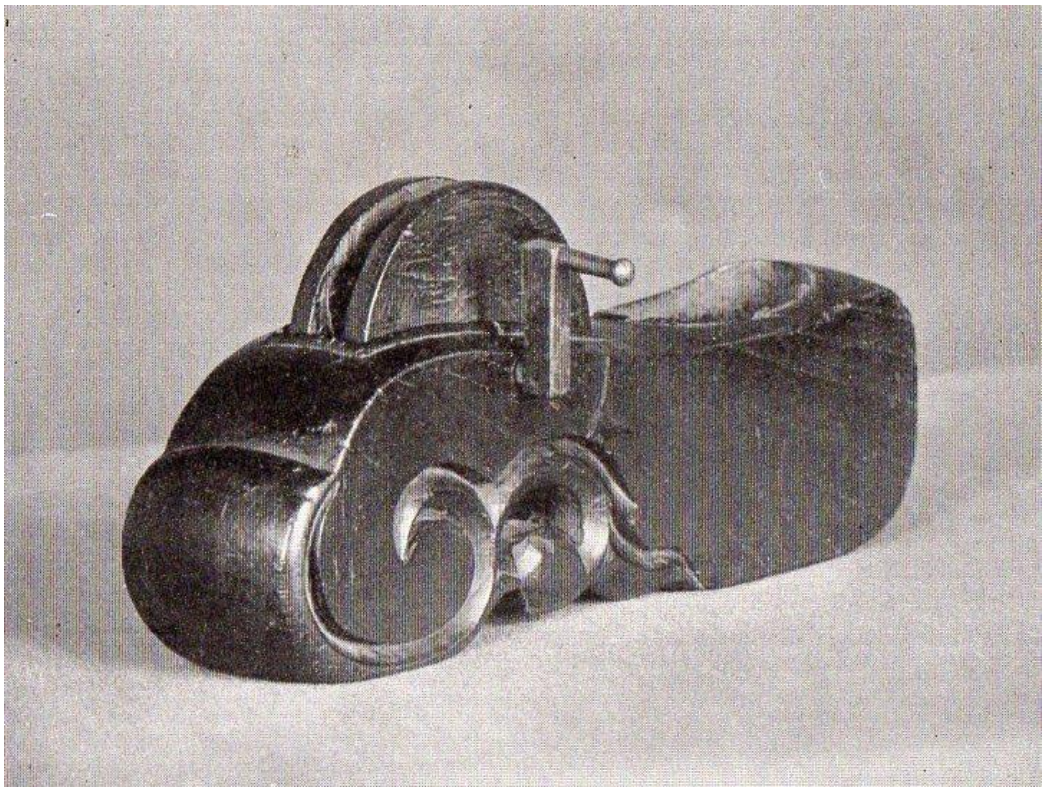

図２　民芸運動における収集品の墨壺（日本民芸美術館編 1927 より）

図３　河井寛次郎記念館における自在鉤の展示

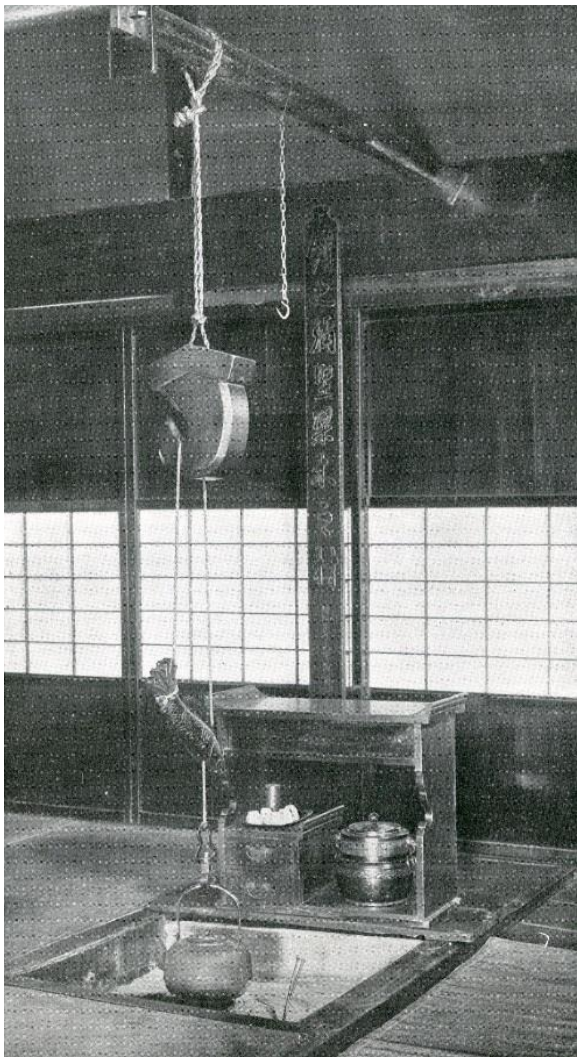

図４　囲炉裏における自在および自在鉤（秋葉 1932 より）